

残そう、自然の宝石箱・のりくら

くらがね通信

No.52 (春号)

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会

平成 25 年 4 月 20 日発行

第13回総会・環境講演会を開催

3月23日(土)に当会の第13回定時総会を高山市民文化会館にて開催しました。平成24年の事業・会計報告、平成25年の事業計画、予算案を審議し各議案は了承されました。今年は昨年行われた「ライチョウ会議岐阜大会」のような大きな行事は計画されていませんが、乗鞍スカイライン開業40周年ということもあり、一度だけでなく数回は登って乗鞍の今を楽しんでいこうと考えています。繰越金も十分ありますので、参加しやすいような参加費設定も考えています。

尚、総会では運営委員会から提案された事業が計画されただけですが、会員さんから、このようなことを企画していただきたいなど、要望がありましたら是非、運営委員に提案してください。要望に沿えるよう運営委員会で検討していきます。会員みんなで当会を盛り上げていきましょう。

総会に先立ち環境講演会が開かれ、『乗鞍スカイラインと植物の変遷』と題して岐阜生物多様性研究会代表の田中俊弘先生(岐阜薬科大学特命教授)に講演をしていただきました。田中先生は長年乗鞍スカイラインを歩いて沿道、周辺の植生などを見てこられて、沿道の木々の枯死は酸性雨によると思われていたが、そうではなく雨水が道路の側溝からの一時水などによる土壌流失で枯死に至ったようだ。道路沿いではマント群落ができ少しずつではあるが植生が回復しつつある。しかし、道路を造ったせいで風が通りやすくなり、また除雪の影響により縞枯れ現象が起きている。マイカー規制で良くなったことは、コマクサが増え、ライチョウをよく見かけるようになった。観光客のマナーもよくなり、乗鞍を楽しむため滞在時間も伸びてきた。などと話されました。

環境講演会 『エゾライチョウについて』

講師：藤巻 裕蔵 氏(日本オシドリの会会長・帯広畜産大学名誉教授)

5月25・26日に高山で『第6回日本オシドリの会全国大会』が開かれます。それに併せて北海道より鳥類学の藤巻先生が来高されますので、この良い機会に先生に講演していただきます。日本では乗鞍などで見られるライチョウの他に北海道だけで見られるエゾライチョウの2種類がいます。このエゾライチョウについて話していただきます。

日時：5月24日(金) 夜7時より 場所：高山市民文化会館

乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 第13回総会

3月23日(土) 於 高山市民文化会館

- 1) 開会
- 2) 会長あいさつ 飯田洋
- 3) 議長選出
- 4) 議題 平成24年会務・事業報告 事務局・宝田
平成24収支決算報告・会計監査報告 会計・佐藤、 監査・向田
平成25年事業計画 事務局・宝田
平成25年予算案 会計・佐藤
その他報告
- 5) 閉会のことば 小野木副会長

◎ 平成24年 会務報告

- 1) 会員状況： 25年 1月末 会員数 98 (個人・家族94、団体4)
- 2) 会議関係： 総会 平成24年2月18日 ・ 運営委員会 毎月1回開催

◎ 平成24年 事業報告

- 1) 第12回総会・講演会 2月18日 高山市民文化会館
『里山をめぐる人と生き物の関係ートヨタテストコース開発からサシバの保全ー』
講師：大畑孝二(豊田市自然観察の森所長)
- 2) 環境講演会『サクラマスが教えてくれたこと』 11月6日 高山市民文化会館
講師：安田龍司・天谷菜海(サクラマス・レストレーション)
- 3) 自然観察会「平湯の自然」(飛騨高山ふるさとを歩こう会と合同)
5月27日 29名
- 4) アサギマダラ・マーキング会 8月29日 22名
- 5) 公開講座 『自然談話室』 高山市民文化会館
5月18日 「自然観察の楽しみ」 小野木三郎
「生物多様性ひだたかやま戦略・実施行動計画」(全5回) 小野木三郎
6月22日 「戦略の大要と実施行動計画の大要、その差異はあるの？」
7月6日 「生態系の保全・再生問題について」
8月31日 「野生生物の保護・管理問題について」 (直井清正)
9月21日 「生物多様性の普及啓発問題について」
10月26日 「これまでの取り組みとまとめ」
- 6) 「第13回 ライチョウ会議 岐阜大会 in 高山」(実行委員会・事務局)
10月13日～15日 (高山市役所市民ホール・乗鞍岳)
- 7) 季刊の会員だより 『くらがね通信』 No. 47・48・49・50 発行送付

◎ 運営委員、会計、監事(任期：24・25年の2年間)

- 会長 飯田洋 副会長 小野木三郎・直井清正
事務局長 宝田延彦
運営委員 松崎まみ・古橋洋子・田之本克己・住寿美子・中島照雅
会計 佐藤八重子
監事 向田真一・米澤智子

◎ 平成25年 事業計画

- 1) 第13回総会 3月23日
- 2) 自然観察会 乗鞍岳6~8月・どんぐり10月
- 3) アサギマダラ・マーキング 8月下旬
- 4) 環境講演会 3月23日(土)「乗鞍スカイラインと植物の変遷」 田中俊弘
5月24日(金)「エゾライチョウについて」 藤巻裕蔵
- 5) 公開講座『自然談話室』・学習会・出前講座等 (随時)
- 6) 季刊の会員だより 『くらがね通信』発行送付(年4回)
- 7) 要望書、提言等提出
- 8) その他、調査活動等

◎ 平成24年 収支決算報告

(収入の部)

	金額	備考
平成23年繰	721,859	
個人 7	169,000	年会費 2,000円 複数年含む
家族 1	30,000	年会費 3,000円
団体	30,000	年会費 5,000円 複数年含む
雑収入	22,625	ライチョウ会議より、利子、
合計	973,484	

(支出の部)

	金額	備考
会議費	15,350	文化会館使用料
通信費	62,750	郵送料・切手・葉書他
事務費	13,423	コピー・封筒・テープ・ラベル他
印刷費	36,770	くらがね通信(年4回発行)
事業費	181,416	講師謝礼、交通費、宿泊、保険他
合計	309,709	

25年予算案

(収入の部)

	金額
繰越金	663,775
会費	250,000
合計	913,775

(支出の部)

	金額
会議費	10,000
通信費	60,000
事務費	10,000
印刷費	40,000
事業費	180,000
予備費	613,775
合計	913,775

973,484(収入) - 309,709(支出) = 663,775 (次年に繰越)

監査の結果 適正と認めます。

平成25年2月8日

監事 向田 直 

監事 米澤 智子 

『乗鞍スカイラインと植物の変遷』

田中 俊弘 氏（岐阜生物多様性研究会・岐阜薬科大学特命教授）

私は植物社会学をやっている。どんな学問かと言うと、例えば東濃地方のシデコブシを守るのに、シデコブシだけを集めて畑みたいに植えて、他の植物を皆伐すればいいという考え方だったが、私はモウセンゴケやヘビノボラズなど様々な植物が生えている所にシデコブシは生えているので、生物は環境があって成り立つ、もともとある環境を守るべきだと言った。ちょうど生物多様性という言葉が使われ出した時だった。そういったことで講演会などを行った。



そんな経緯から乗鞍スカイラインが拡幅し供用開始になって2年目から乗鞍の資料をもらうようになり、植物の群落を調べると言うことで、道路の法面の崩れている所の植物の変化を調べてきた。新聞の記事に森林限界のヘアピンカーブのところでシラビソ・オオシラビソの枯れているところは酸性雨の影響ではないかと記載されたことがあり、亜高山帯の植物を調べた。未だに毎年年に数回くらい上から歩いて植物を調べている。其の時興味を持ったことについて話す。



6月～7月頃のハイマツは6月頃から一面茶色になる。これは雪が溶けて外に出た時に強風が吹くと枯れるもので、先だけ枯れるのですぐ再生する。又白骨化していて危機感を覚えた事があるが、自然の摂理でなった物もあるということが分かった。又道路の側溝があるような所では、どんどん枯れ上がってくる、縞枯れ現象も見える。しかし下のほうに小さいのが生えてきている。

岐阜県側では早い時期に除雪のためロータリーで雪を飛ばすため雪がかかる部分には枝が出なかったり、幹が曲がってしまう現象が見られる。また木の上が跳ねられているものもあり長野県側では見られない独特の景色が見られる。また、長野県側だと側溝・路肩のそばから木が生えているが、岐阜県側は側溝から何メートルか離れたところから木が生えている。これも除雪で飛ばされた雪で押さえられて草木が生えにくくなっているためと思われる。

標高2,000mの所に、マイカー規制になってから撤去された展望台の跡地があるが、そこは規制前には双眼鏡が置かれ駐車場スペースもあった所である。今はササ原になっているが昔は砂利が敷かれていた。今は止まる人もいないが、以前5月15日からスカイラインを試験的にやると言う時にマイクロバスで登った時に、その木の根元にオオバコが生えていた。昔はもっと生えていただろうが、今はササが広がり、陽が当らず其のうち無くなるだろう。



軍用道路を作った時から木を伐採すると隙間が出来、端っこの風辺りが強くなり枯れていくという縞枯れ現象が見られる。シラビソやアオモリトドマツ等の祖先をシベリアなどにもつこれらの

木々は根っこの張りが小さい。大きな火山性の岩のある所に生えると、鉛筆を一円玉の上に立ててくっつけるようなもので、風が吹くとひっくり返る。上の方が折れると根っこに種が落ちて稚樹が生えると言う現象が見られ、これを根元更新という。又倒れた木の上に未生が出てくる倒木更新もある。木が一行に並んでいるのは倒木更新である。こんな風にして森林は更新していく。根元更新について具体的に説明すると、一本の木が枯れる、其の根元に種が落ちて木が生える、其の木の根元の先代の根が腐りクマが入れるくらいの穴が出来る。そして又枯れる。これを何回も何回も繰り返す。このように縞状に枯れたところが残る。このような枯れたところの先駆植性はヤナギやダケカンバがあり、次にナナカマド等が生えマント・ソデ群落となり風が入らなくなり枯れることもなくなって森は修復していくのである。



以前宮脇昭先生が照葉樹林の植物社会学というのを提唱され盛んだった。例えばハイマツの下にコケモモやキバナシャクナゲがあって、それらの植物は持ちつ持たれつの関係で成り立っている、という考え方である。百種類くらいの植物の種をまくと、其の地に適した持ちつ持たれつの植物が出てきて、植物社会が形成される。つまり何でもいいからといって種をまいても最終的には其の地に適した潜在自然植生が残るという考え方である。もっと分かりやすく説明すると、道路の法面に西洋タンポポの種をまいたとする。最初は栄養が無いのでタンポポが生えるが、それが枯れて栄養が蓄えられると、最終的にはそこにあった植物、潜在自然植生に落ち着く。スカイラインで言うなら乗鞍本来の植物になる。こんな考えを信じていたのであるが、帰化植物・移入植物という言葉が出てきて、有害外来植物が使われ始め、外来植物といわれるようになって問題になりだした。

現在、外来植物の駆除が行われている。土俵ヶ原のヘアピンカーブの所には何故か日本のシロバナタンポポが多くみられる。車についていたのがカーブで振り落とされるのかもしれない。森林限界のところで、酸性雨で枯れていると思われたところを調べたら、そうではなく道造ると急斜面の山を削ることになり、その泥が木にかかり木が枯れたようだ。又今まで斜面を流れていた雨水が側溝に集まり一時水となって泥を削ってしまう。それが原因で縞枯れ現象が現れることもある。それ以外の現象があれば酸性雨の影響と思われるのだが、その現象は見られなかった。

土俵ヶ原の下の盛り土の上に作った駐車スペース辺りにアスファルトが割れているところがあるが、早く手をうつ必要がある。

乗鞍で本来なかったはずの植物に出会うこともある。たとえば乗鞍本宮の神社の所にフキの群落がみられる。これがどんどん中へ侵入しているようだ。

スカイラインの自然への影響などについて述べたが、マイカー規制された事によるメリットはコマクサが増えた事。マイカー登山が出来たころは未生を踏み荒らしていたようだ。又ライチョウも良く見掛けるようになった。そして客についても以前は街の服装のまま来る人が多く滞在時間も短かったが、今は観光バスから降りてくる人は山用の服装・装備の人が増え、滞在時間も長く、マナーが良くなり山を楽しむ人が多くなった。



立ち入り禁止内で記念撮影する観光客。
足元にはコマクサの花が咲いている。

(2007・8・6・桔梗ヶ原)

「飛驒山脈を世界自然遺産」に!!

副会長 小野木三郎

さる1月30日岐阜新聞の総合版報道によると、環境省は、2013年の検討として、日本からの世界自然遺産登録申請候補地として、北海道の大雪山の他、飛驒山脈(北アルプス)を挙げ、検討に入るとのことです。

赤石山脈(南アルプス)については、関係する地元10市町村が登録推進協議会を結成し、山梨県、長野県、静岡県、静岡県の三県もオブザーバーとして参加しています。20ページに及ぶ豪華カラーの冊子を作成、学術的検討会、フォーラムの開催など活発に運動が進められてきています。これに比べ、飛驒地方の動きは何とも静か、淋しい限りといえます。国が候補に挙げ検討するからいいじゃないの。国に任せておけばいいのでしょうか。地元からの強力な支援の声があれば…とは思いませんか。

これまでは組織的動きまで盛り上がりならず、昨年10月7日(日)に、『登録を訴えて』の副テーマを掲げてコンサートを実施、11月24日(土)には、日本山岳文化学会で講演発表し、現在岐阜新聞に、金曜隔週で「飛驒山脈は世界自然遺産」を連載中(1月4日スタート、3月29日で5回目)と、いわば全く個人的な発言に過ぎません。本会を中心に官民一体となった地元の推進協議会など、何らかの組織的活動が必要と考え、市役所へは直接資料添付で提言してきました。(2月4日)会員の皆様方のご支援ご協力をお願いします。以下、大会講演要旨を転載する。

山楽山歩(さんがくさんぽ) 海外編43回の実践から得たこと

小野木三郎(乗鞍岳と飛驒の自然を考える会副会長)

1. はじめに

高校生物教育研究会全国大会が、岐阜市で開催された折、京都から参加の田中千聖さんがエクスカーションで乗鞍岳自然観察会に参加された。カイコのホルモン研究を専攻し、生物の教員となった彼女にとって、乗鞍での自然体験は、自然観・教育観に新しい視点を与え、以後私の飛驒山脈生態調査登山に同行、やがてネパールへ青年海外協力隊員(理科教師)となって赴任した(1988年12月)。

山人間にとっては、ヒマラヤの山々こそは一度は訪れてみたい所、彼女の赴任中に慰問を名目にトレッキングを企画、聖地ゴサインクトへ出かけた。耕して天に至る国の自然の実態に接して、改めて日本の自然の豊かさ、多様性に気づかされ、世界各地の緑の実態への関心が高まり、山を楽しみ山を歩く・・・をモットーにした海外の山歩き・自然体験の旅が始まった。

2. これまでの訪問地

第1回ネパール、聖地ゴサインクト(1989年3月)、第2回カナディアンロッキー(1989年7月)以降、ネパール14回、モンゴル7回、中国7回、スイス4回、カムチャッカ3回、カナダ2回、ブータン、パキスタン、キナバル山、アラスカ、インド各1回と、今春のガウリシャンカール展望、今夏の知られざる東モンゴルで43回を終了した。

3. 飛群山脈の特異性

これまでの43回の海外自然体験・調査結果と、飛驒山脈での長年の自然生態調査結果を比較検討した結果から考察すると、以下の諸々の理由により「飛驒山脈は、世界自然遺産」に登録されて当然の価値があるとの結論に至った。

- (1) 欧米の山岳にはハイマツは分布せず、東北アジアと日本が分布圏であるが、カムチャッカ半島などの北方ではダケカンバ林の林床植生が主体である。飛驒山脈の高山帯に見られるハイマツの樹海、斑点模様の景観は、世界に類を見ない独自の自然景観である。
- (2) 世界一ともいえる多雪山岳地域で、夏場の雪渓・残雪の豊かな高山帯の景観も、世界に類を見ない独自の自然景観である。

- (3) 地球的視野からすると低緯度の南方に位置し、標高も 3000m の低い山岳に過ぎないのに、高山植物相は驚異的に豊富で、世界の分布南限地に相当する種が多くある。
- (4) 歴史の古さを物語る温帯性針葉樹や原始的な花のつくりの植物群など、日本固有・特産種が多くある。
- (5) 山麓一帯は夏緑広葉樹林帯で、ブナ原生林を含み、中腹はタイガに相当する針葉樹林、山頂一帯はハイマツ低木林と高山植物の世界でツンドラに相当する。こうした垂直分布帯は北半球の植生の縮図であり、その自然の多様性に富んだ生態系の価値は、日本での他の世界自然遺産登録地「知床・白神・屋久島・小笠原」に比べて、少しの遜色もないばかりかそれ以上に価値高い自然の宝石箱である。
- (6) 氷河期からの遺存種ライチョウは、木曾山脈、八ヶ岳、白山等々各地で絶滅を繰り返し、東北、北海道には生息していない。御嶽山を含めた飛騨山脈に生息するライチョウは、世界の最南端に隔離分布している特殊な集団であり、第二のトキ、コウノトリにしてはならない。

『第13回 ライチョウ会議岐阜大会 in 高山』(No2)

『野生動物との共存の道をさぐる』—哺乳動物の高山帯への侵入—

羽山 伸一（日本獣医生命科学大学・獣医学部獣医学科 教授）

神奈川県の日沢山地でのシカ問題に取り組んできた。日本で最初にシカ問題が発生したのが日沢山地である。広さ5万haで一番高い山でも1700mなのでライチョウがいるほどの高いところではないが努力すれば成果は出せる。参考になればということで話をさせていただく。

私は長年サルに取り組んできた。近年サルが何故3000mまで登るようになってきたかと言うと、一言で言うと個体数が増えたからだ。日本では明治・大正時代に人間生活に影響を与える野生動物が徹底的に排除されてきた。最初にオオカミが絶滅した。サルも絶滅間際まで追い詰められてきたがそれ以降回復してきている。高いところへ登るだけでなく下へも降りてきて農業被害もでている。クマについても減っているところもあれば増えてきているところもある。九州では絶滅した。

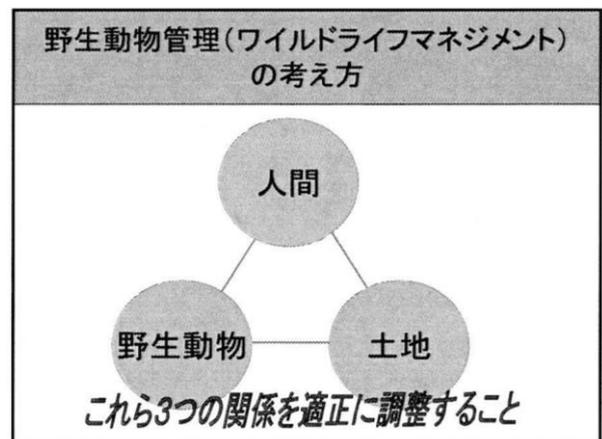
現在、一番深刻な農業被害がでているのはイノシシで、イノシシは捕食されることが前提にして進化してきた。でも捕食者がいないので爆発的に増えてきた。東北から西日本全体まで一気に分布が拡大している。野生動物の拡大は当然被害の問題がある。これから被害が心配されるのが感染症である。イノシシは豚と同じ動物で口蹄疫が野生動物にかかると取り返しがつかない状況になってしまう。養豚場周辺にも来ているし、すでに侵入しているところもある。鳥では“鳥インフルエンザ”特に高病原性鳥インフルエンザが世界的に蔓延しているが、大半が野鳥から検出されている。人と家畜、野生動物その間の感染がこれからの野生動物の問題となってくる。特に希少性の動物の絶滅原因が非常に大きな要素となっているので、ライチョウにとっても感染症対策も検討になってくるだろう。

野生動物問題の多様化・深刻化

- ・農林水産業被害による地域崩壊
- ・里地里山に生息域が定着(クマ)
- ・都市地域へ被害が拡大
- ・生態系への影響が顕在化(シカ)
- ・外来動物の分布拡大
- ・新興感染症の侵入と蔓延

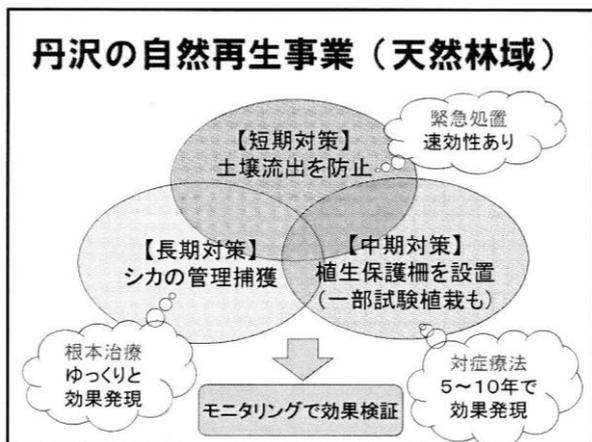
ワイルドライフ・マネジメント

⇒ **野生動物管理は社会システム**
防災・医療・教育などと同じ



野生動物問題は多様化・深刻化してきた。野生動物管理（ワイルドライフマネジメント）とは社会のシステムである。これは世界では当たり前の考え方なのに日本では、これらの問題を解決するための専門家であるプロがないのではないか。

丹沢ではシカの増加によって野生動物が野生植物を滅ぼしていると言う異常な事態になっている。ならばシカを捕獲すればよいと思われるが、年々、狩猟者人口が減ってきている。近年、行政が様々に支援し捕獲数は増加しているが食害が減っているわけではない。日本全体を見ても昭和初期からの統計から見ると100万頭で推移していたが今はそれほど捕獲されていない。



シカ問題対策を行なうため、丹沢では自然再生事業をスタートした。様々な対策事業をいっぺんに行なうのは難しいから、“生態系の基盤は土壌から”ということで、土壌流出が進んでいる特定地域を選んで土壌対策から始めた。それと平行してシカの管理を行なうこととした。やれることではなく優先的にやるべきことから始めた。また、誰(部局)がやるかではなく、どこ(場所)で何時やるかが大事だ。そこで地図を共有して植生回復事業を行なった。

土壌流出対策と同時に植生保護柵設置も行なった結果、徐々に植生が回復しそれに伴って昆虫、それを餌とする鳥なども徐々に増えてきた。一番問題となっているシカの個体数はわからないので、生息密度の低いところから主にメスジカを捕獲するという管理捕獲をはじめ、その結果を基に生息密度が高い場所へとハードルを上げていくことをしている。

しかし、捕獲している場所ではシカが減って植生は回復傾向だが丹沢全体を見ると植生の衰退が進行している。そこで人工林域では「水源税」を財源にして間伐を実施し、同時にシカの管理捕獲も行なっている。

2012年からの新たな取組

- 1 森林管理とシカ管理の一体化
 - ・水源林整備地周辺での管理捕獲
 - ・森林施業とシカ捕獲の連携の試行
- 2 標高の高い山稜部での管理捕獲
 - ・新たな捕獲手法の検討・実施
- 3 シカ捕獲等に従事する専門職員
 - ＝ワイルドライフレンジャーの配置

(今年の第14回ライチョウ会議は、11月3・4日に山梨県南アルプス市で開催されます)

会員状況

平成25年3月末会員数 一般 94名, 団体 4 団体

■ 会員を募集しています！ 年会費 = 個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円
あなたの知人、友人に ・ 郵便振替 00800-8-129365
入会をおすすめください ・ 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第52号 (春号) 平成25年 4月 20日 発行

発行者 乗鞍岳と飛騨の自然を考える会 〒506-0055 岐阜県高山市上岡本町 4-218-3 飯田 洋
 TEL 0577-32-7206 ・ FAX 0577-32-7207

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

- 編集責任者 : 宝田 延彦 E-mail : nobu1995@peach.ocn.ne.jp TEL(FAX 兼) 0577-34-1287
- 編集者 : 住 寿美子 TEL 0577-34-7237

表紙写真提供 : 小池 潜

印刷 : アドプリンター